

## 日本の宝は、着物、日本酒、漆器。 この3つだと思っただけです。 赤木明登さん

あかぎ、あきと 漆師

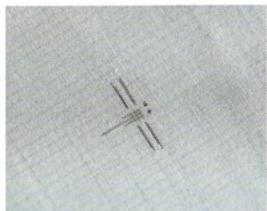
「まだ袖を通してないんです。去年の夏に仕立ててもらって、着ようと思っただけですけれど、あまりに暑くて着られなかったんで、それを今日、ついに着る。大島紬作家、田畑安之助さんの夏大島、あちこちに小さなトンボが飛んでいる。」

「襦袢を白にして、足袋なしで下駄。で、緑台で一杯。日本の宝は、着物、日本酒、漆器。この3点ですから。着物はお茶の稽古のときには必ず着ています。自分で？ うん、着られませんが、それがまた楽しいんです。うまくいかないときはメタメタですけど。お茶のときは袴をつけるので、普通の着物よりずっと楽です。お茶は18歳から始めて、最初は裏千家。6年前に武者小路千家に変わって、そのときに、着物を着てお稽古しよう、と」

袖があるのと、ないのでは所作が違ってくる。考えれば当たり前だけれど。

「田畑さんとは銀座（東京・中央区）の呉服店で知り合って、暮れに遊びに行ったら、織っていたのが、これと同じけど、トンボではなく、メダカ。裾丈が女ものだったので、妻のものに。次の年に機を立ててもらって、柄をトンボにしてもらったんです。田畑さんもお酒が大好きで、ぐい呑みが欲しい、っておっしゃるんで、一部、物々交換！」

「なんだか、とても愉しそう。ものを作る者同士ゆえの特権的愉しさのようで、羨ましい。」



このトンボが全体に飛んでいるわけですが。妻の智子さんの着物はメダカ。このトンボを見てみると、メダカの顔も想像できるでしょう？



上は大島紬の帯。「作者は益田勇吉さんです」。下は紗の博多帯。瓢箪と桜の柄。これまたお酒が美味しく呑めそうな柄だ。

「田畑のおっちゃんが好きなんです。もう60代半ばぐらいかな。奄美大島の人で、織るものは繊細なのに、チョンマゲヘアに着流しでオーブンのスポーツカーに乗っているんです」

若い頃は相当なモダンボーイだったに違いない、そう赤木さんは語っている。

「僕は、さつきも言ったように、着物と日本酒と漆器、これが日本の宝と思っているんですが、3つとも減り始めている。生産量が落ちてしまっている。1980年代パブル時の10分の1ぐらいに売り上げが落ちています」

「一点で値の張る作品的なものへと移行する、作り手としてはその選択もありうる。技巧を極め、一体、誰がいつ使うというんだ、と言いたくなる、そういうものが『伝統』ととらえられやすいけど、でも、赤木さんは、普通に『漆をやりたい』と思う。皆が日常に

使い続けたからこそ、それが伝統になったのだから。

「日常にしか生き残る道はないと思います。今日、持参したお酒は広島酒『竹鶴』で、杜氏が江戸時代の方法で造っています。田畑さんも手織りだし。漆もハレとケに分かれていて、ハレのものしか残っていないから、僕はケのものを作っている。日常性を取り戻していかないと、減っていくと思いますよ。伝統を日常に落とし込まないと。それに取組まないとい、使ったことによって残すしかない。『日常の伝統』という企画をしてください」

しかし、いい水色だ。男の人の着物には珍しい色かもしれない。いや、でも、冷酒には似合うかも。

「夏の空の色じゃないかと思うんです。朝早くとか、こういう色があるんです」



撮影・齊木和義 撮影協力 かくれ表参道店

「着物といえば、輪島は今でも徒弟制度で、年季明け式の時、親方と子が盃を交わすんです。弟子入りして4年たつと、羽織袴から全部、親方が作ってくれて、金屏風に緋毛氈で親子固めの儀式をするんです」

輪島塗職人のもとで修業後、独立。著書に『毎日つかう漆のうつわ』『美しいこと』（共に新潮社）など。全国で個展を開催。http://www.nurimono.net/

さつき、散髪もしてきました。  
ソフト・モヒカン風です。